

平成30年11月8日(木)

### おのが出生の出来事

小さい頃の写真を見ると、特に1歳未満から3歳ぐらいまで、左目をつむっている写真が多い。

母が言うことには、「母も子も危ないといわれる中、ようやくこのことで鉗子分娩でお前が生まれてきた。」生まれてくる時、左目の上に鉗子が当たり、長い間左の眼をつむりがちに過ぎたのだそうだ。

そんなことから、顔がゆがんでいるように見えることがあって、中学生の時に「お前の顔は曲がっている。顔曲がりだ。」と指摘され、心ならずもずたずたに傷ついたことがあった。

まして、小学校1年生の時に赤緑色弱という診断があり、赤い色と緑の色がすぐには区別がつかなく、赤い花が暗闇の中に見えるとき、緑色だと認識することがあったり、緑色の林を茶色の絵の具で色付けして、保育園のころ、枯れた林かといわれてみたり、自分が人と違うのだということから少なからずもやもやした気持ちの中にいたころのことだったので、中学3年時代はとてもまっすぐにはいけないなと沈みがちになる日々だった。

救われるまでには、気の遠くなるほど長い時間が必要だった。

赤緑色弱は隔世遺伝で、母方の祖父からの遺伝であることを知るようになる。中学生の時だったか母を責めたこともあった。

大学入試の募集要項には、理系の工学部や医学部には、赤緑色弱は不可という文言がまさしくあり、自分は文系に進まねばならぬと悟ったのは、高校生の時であった。

50歳になったある日、桜の花が咲き始めた大きな桜の幹を手で触りながら、もしかして、赤緑色弱は、私の中に祖父がいることの証かもしれない気が付いた時、突然体が熱くなり、ほっとした瞬間を経験することになった。もしかしたら、祖父の祖父もこの中にいて、祖父の祖父の祖父も必ずいるのだと悟った時、涙が込み上げてきた。救われたと思えたのだ。

また、今年になって、なにげなくある雑誌を読んでいるとき、さだまさしが、「自分は鉗子分娩で生まれてきて、目の下に黒いクマがあったことを長い間気にして暮らしてきた。」と書いている文章を見たとき、自分だけではなく傷ついている人はたくさんいたのだと、とても心が軽くなった。

ここに至るまで、50年以上の月日が流れている。50年以上人知れず自分をさげすみ、蔑視していたことでもある。

ところが、長い年月をすごしてのある日、その思いが氷解することを経験すると、とても不思議な気持ちになった。ここまで我慢しないと氷解しない思い

であったのかとも思う。もっと簡単にいかないのかと今だから思ったりする。

でも、簡単ではない。一人ひとり簡単ではない思いを抱いて、毎日を送っているのだろう。

きっと、世の中のすべての人も、磐城高校の一人一人の生徒も、何かを背負って歩いているのだ。私にはわからない何ものかを懸命に支えていることもあるのだろう。

何もできないかもしれないが、そのことだけはわかっていると、いつも子供たちには、テレパシーを送ることにしている。

校長としてできる唯一のことかもしれない。